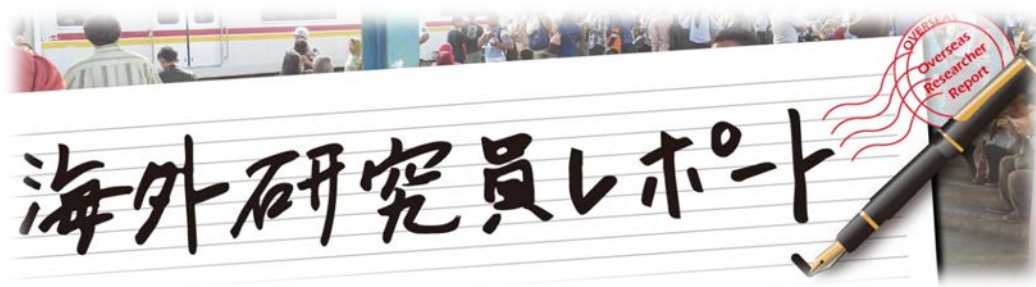


バタム島孤児院を訪問して

著者	土佐 美菜実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	IDE スクエア -- 海外研究員レポート
ページ	1-6
発行年	2020-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00051542



バタム島孤児院を訪問して

土佐 美菜実

2020 年 1 月

(4,300 字)

* 写真は文末に掲載しています

筆者は 2018 年よりインドネシアのジョグジャカルタに 1 年間滞在したのち、現在はシンガポールに居を移している。シンガポールはマレーシアだけでなく、インドネシアとも海峡を挟んで隣接しており、その近さから文化や気候など、様々な場面で共通点を感じ郷愁にかられることも時々ある。ただ、筆者が昨年まで暮らしていたジョグジャカルタはジャワ島南岸に位置し、インドネシアに住む 400 以上といわれる民族のなかでも最も人口の多いジャワ民族の文化が色濃い地域であった。一方、シンガポールとわずかな距離の海峡を隔てて近接しているのはスマトラ島やリアウ諸島などで、これらの島からはフェリーで簡単にシンガポールへ渡航することができる。

これまで、シンガポールに暮らすインドネシア人と会う機会も多々あり、なかにはこうした隣接の島々からの出身者もいた。特に、今まであまり出会うことのなかった中華系インドネシア人とも多く知り合うようになった。彼らのなかには公用語であるインドネシア語よりも中国語を家庭内言語として流ちょうに話す人もおり、シンガポールでも中国語でコミュニケーションをとる毎日であると聞いた。こうした状況はインドネシアの多様性を感じる一面でもある。同時に、彼らの故郷と目と鼻の先にある都市国家シンガポールは、彼らにとってどのような存在なのか、ふと考えさせられることもある。

こうしたインドネシアとシンガポールの関係を日々考えるなか、シンガポールに最も近いインドネシアの島のひとつ、バタム島に渡り、孤児院を訪問する機会があった。以下ではその時の様子を紹介したい。

バタム島の孤児院

バタム島はインドネシア・リアウ諸島州内にある約 800 平方キロメートルほどの小さな島である。シンガポールからわずか 20 キロメートル南方に位置し、フェリーに乗って 1 時間ほどで行き来することが可能だ。シンガポールに住む人々にとって、バタム島はその近さや物価の安さから気軽にアクセスできる観光地として親しまれている。

また、バタム島は、シンガポールから近いことに加え、相対的に人件費が安いことが強みとなって、多様な業種から輸出製品の生産拠点として注目されている¹。同島の開発は 1970 年に始まったが、その後 1991 年にインドネシアとシンガポール両政府のプロジェクトとして工業団地が建設されたことで本格的な開発が進められていき、電気・電子産業を中心に海外企業の輸出拠点として急成長した。さらに、2007 年にはインドネシア政府によって自由貿易地域に指定されている。

筆者がバタム島の孤児院を訪れたきっかけはシンガポールで知り合った友人の誘いであった。あの小さな島には多くの孤児院があると聞き、同行することにした²。

インドネシアにおける孤児院の状況について触れておくと、孤児院の正確な数を把握した公式の統計はない。全国でおよそ 5800 以上の孤児院があると言われているが、そのうち公立施設は 100 に満たない³。大多数を占める私立施設の多くは、ナフダトゥル・ウラマーやムハマディアといった国内の主要イスラム教団体などが運営している。

当日、バタム島に到着し、私たちを待っていてくれた地元の運転手と挨拶を交わし、さっそく孤児院へ向かう。今回は日帰りですぐ 2 つの孤児院を訪問する予定となっていた。向かう途中の街並みは 1 年前まで住んでいた街の見慣れた風景によく似ており、インドネシアに来たことが強く感じられた。

道中、運転手が筆者の友人に少し神妙な面持ちで何かを話していた。どうやら、今回訪問する予定の孤児院のうち、片方の孤児院の代表者が運転手を通じて私たちに金銭の寄付を頼んでいるらしい。しかしながら、この日は事前にその代表者と連絡を取り合い、孤児院の子どもたちへの贈り物として玩具や筆記用具、衣服などを用意するだけになっていた。ところが、訪問の前日にその代表者から現金での寄付をお願いするように運転手へ連絡があったようだ。とは言え、今回の訪問にあたり私たちが用意していたのは品物だけだったので、代表者の要望については理解し、次回以降に検討するという事で道中では話を落ち着かせた。個人的な印象かもしれないが、お金の寄付については突飛な話ではないものの、突然のお願いであったため筆者の友人もやや狼狽したようである。運転手も伝言役を急に任され、少々困っている様子であった。

そこで話のついでに、運転手にその孤児院の代表者についても話を聞いたところ、その孤児院はスマトラ島の大都市メダンから来た夫婦が運営していることがわかった。

この話をきっかけに、筆者は運転手とバタム島の孤児院について少し様子を聞くことができた。バタム島では最近また新しく2つの孤児院ができたという。運転手によると、それらはとても「豪華な」孤児院で、シンガポール人の支援を受けて作られたとのことであった。多くの孤児院は、こうしたバタム島外、すなわちシンガポールなどからの支援によって成り立っているという。もっと運転からいろいろ話を聞きたかったが、1つ目の孤児院に到着したため、話を中断して乗っていたバスを降りた。

孤児院の子どもたちとの交流

バスを降りて1つ目の孤児院にお邪魔する。そこはイスラム教団体が運営する孤児院であった。孤児院で子どもたちの世話をしている女性がこの孤児院についていろいろと説明してくれた。彼女によると、この孤児院には全部で22人の子どもが住んでおり、両親がいない子どもだけでなく、父親または母親のいずれかはいるが、子どもを育てられない状況にあるため預けられている子どもなども暮らしている。訪問時には、最近この孤児院に連れてこられた生後2カ月の乳児もいた。バタム島外から来た子どももいるようである。

このほか、エアコンが壊れて使えないこと、マットレスはあるがシーツがないことなど、その女性は孤児院の困窮した状況を含め詳しい様子を説明してくれた。また、現在孤児院として利用している建物は賃貸であるため、建物を購入できるだけの費用が必要であることを訴えていた。設備の不十分さや経済的なやりくりの大変さがあるなかで、子どもたちの親や親せきが迎えに来るまで、あるいは本人が経済的に自立するまでこの孤児院で面倒をみているという。

用意した玩具などを配ると子どもたちは大喜びで遊び始め、最初は恥ずかしそうにしている子どもも次第に打ち解けて名前や年齢を教えてくれるようになった。最後にはみんなで写真を撮り、子どもたちは力いっぱい手をふって見送ってくれた。

続いて2つ目の孤児院へと向かった。ここは先ほどの金銭寄付の話のあった孤児院である。到着してみると、そこはキリスト教系の団体が運営する孤児院施設であった。就学前の子どもから18歳までのおよそ30人以上が暮らしていた。訪問時、就学している子どもは学校に行って不在だった。またこの孤児院もバタム島外からの子どもも受け入れているとのことだった。

さて、最初の孤児院と同様に用意したプレゼントやお菓子などを配り、子どもたちと一緒におやつを食べたり遊んだりしつつ、孤児院の代表者である男性と話をした。彼によれば、現在この孤児院は平屋の建物だが、これを2階建てに増築したいとのこと。そのため建築材の費用が必要で寄付をお願いしたいという。このほか、就学している子どもたちの教科書や制服にも費用がかかるので支援をお願いできないかという

ことであった。筆者の友人は次回の訪問時までにはこの代表者とまた連絡を取り合い、寄付の用意を検討すると伝えた。

フェリーの時間を鑑みて私たちが帰らなければならない時間が近づいてきた。ほんの数時間ほどの滞在であったにもかかわらず、私たちとの別れを心から惜しんでくれているようで、子どもたちの純真な心に気持ちが揺さぶられる。いつかシンガポールの学校に通いたいと話すひとりの女の子が、とても寂しそうにしていたのが印象的だった。

海外からの支援

Batam島の孤児院について少し調べてみると、国際的な支援団体のシンガポール支部をはじめ、シンガポール発の Batam島孤児院への訪問は様々なかたちで数多く企画されており、枚挙にいとまがない⁴。2019年のイスラム教の犠牲祭には、シンガポールとマレーシアから200人のイスラム教徒が孤児院の子どもたちと一緒に祝いするために訪問している⁵。私立の孤児院にとって、費用の大半は善意の寄付に頼らざるを得ない。地理的条件から、自国の政府よりも海外からの支援を受けることの方がこの島ではごく普通なのかもしれない。

今回の Batam島への入港時、私たちは玩具や衣服をパンパンに詰め込んだスーツケースを大量に持ち込んだ。参加者は15人程度で、ひとりにつき大型のスーツケースを少なくとも2つは持っていた。日帰りの旅程にしては明らかにおかしい量の荷物を抱えたこの一団が、周囲の目にはどのように映っているのか、その時は少し心配になった。しかしながら、特に怪しまれることもなくスムーズに入国することができたのである。港でこの集団を怪しむ人は誰もいなかった。おそらく、私たちのようにたくさんの荷物を抱えて Batam島へやってくる外国人は見慣れた光景なのだろう。■

写真の出典

すべて筆者撮影

著者プロフィール

土佐美菜実（とさみなみ） ジェトロ・アジア経済研究所海外研究員（在シンガポール）。2013年ライブラリアンとしてアジア経済研究所に入所。東南アジア地域を担当。

注

- ¹ ジェトロ・アジア大洋州課、ジェトロ・シンガポール事務所「調査レポート シンガポール、ジョホール州、バタム島『成長の三角地帯』」2015年6月。
- ² バタム市のホームページによると、2010年時点で孤児院の数は43であった。その後、データは更新されていないため、正確な数は不明である。
- ³ 社会省・子どもの社会復帰局長ナハール氏による2018年の発言から。“Panti Asuhan Perlu Ditinjau Berkala,” *Harian Nasional*, 25 July 2018.
- ⁴ 例えば *La Communauté Catholique Francophone de Singapour* などがある。
- ⁵ “Ratusan Warga Singapura Berkurban di Panti Asuhan Ya Bunayya Batam,” *Bisnis.com*, 11 August 2019.



写真1 贈り物の玩具で遊ぶ子どもたち。



写真2 プレゼントをあけて喜ぶ子どもたち。